

一第61編一 チルドレンズ・ミュージアム^{*1}

ボストンの埠頭に設けられたチルドレンズ・ワーフ^{*2}の一面にボストン・チルドレンズ・ミュージアム (Boston Children's Museum) はある。1913年に空家になった煉瓦造りの倉庫を改造して作られた子供のための博物館である。絵画、造形から理科の学習、さら

りに地域の歴史や文化の学びに役立つような、遊んで、触って楽しめる体験型、参加型の「ハンズオン博物館」の代表例として国内外で広く知られている。入口のそばにある巨大なミルク・ボトルがシンボルだ。

日本でのプロジェクトのために、1960年代から開発された参加型子供博物館を実態調査するためにアメリカやイギリスを訪れた。ボストンはその一環だったが、このようなチルドレンズ・ミュージアムは、1899年にブルックリンに作られたものが一番古いと言われる。全米殆どの州に各種の事例があり、自然史に重点



写真61-1 夕刻のミュージアム外観 ©Robert Benson/BCM 提供

^{*1} Boston Children's Museum (BCM)

^{*2} Children's Wharf (旧Museum Wharf)

^{*3} Hands-on Museum: 体験型・参加型博物館



写真61-2 シャボン玉と女の子 © Les Veilleux/BCM 提供

を置いたものから、交通、日系アメリカ人の文化にいたるまで、いずれも楽しくバラエティに富んでいる。当時のBCM館長は『スポック博士の育児書^{*4}』で有名なベンジャミン・スポック^{*5}博士の息子マイケル・スポック^{*6}で、調査を通じて親しくなった。

BCMでは、たとえば地下空間を走るインフラを3次元で見せ、その上の階に住まいとまちの断面を展示する「タウン・スライス」を初め、仕組みを可視化し感性に訴え体感できることに重点を置いた展示が大変魅力的だった。また、姉妹都市京都の町家を再現し、その中に子供たちが泊まれて日本文化を体験できるだけでなく、現代の日本でこのような伝統的住まいがどのように住みこなされているかが理解できるような、リアリティーのある情報伝達が行われていた。

そして、博物館での展示内容や知見は頻繁にリニューアルされ、それを支える開発体制も大変充実している。地域での教育にも寄与できるように、そのキットが貸し出され、博物館が知の生きた暮らしに役立つ、そんな役割を目指していることがよく理解できた。



写真61-3 科学の遊び場での親子 © Clive Grainger/BCM 提供

^{*4} The Common Sense Book of Baby and Child Care, 1946

^{*5} Benjamin Spock (1903~1998): 米国の著名な小児科医師

^{*6} Michael Spock